

学舎にて

毎日が、歴代の皇帝陛下の御裁可の内容と、それらに対する司法官の解釈、あからさまに言つてしまえば無理やりなこじつけを暗記するだけという作業が、あと何年も続くのだ。そう思つた瞬間に、わたしは転学部を決意した。

「フロイライン・マリンドルフ、まだ講義中だぞ。畏れ多くも大帝陛下の御裁可に関する講義を中座するとは何事かね。不敬の罪に問われても良いのか？」

「——講義は欠席にして頂いて結構です、先生」

どうせ、もつこの教室に戻ってくるつもりもない。わたしの決意は固かつた。大帝陛下は偉大な人物だつたかも知れないけれど、予言者でもなければ、スーパーマンであるはずもないじゃない。それなのに、大帝陛下のお言葉だからって、どう聞いても雑談だとか冗談にしか聞こえない話を、いちいち判例扱いして記憶し続けるなんてことは、わたしにはもつ我慢できない。ええ、金輪際。

法学部の建物を出て、キャンパスを横切る。行き先は事務棟だ。ずっと前から、そこへ行くことを考え続けてきて、とうとう、今日、我慢が限界に達してしまつた。

すれ違う学生たちがびっくりした顔で立ち止まつたり、振り返つたりしているのが目に入った。わたしは小柄な方ではないけれど、ついこの間までは晴眼帝記念女子学院高等部の制服を身にまとつていたわけだから、どうしても子供っぽさが抜けていないのだと思う。そんな女の子が血相を変えて、そうじゃなくて眦を決してキャンパスを駆けていくのだから、びっくりされるのはある意味、やむを得ないし——それに、も

うそんなことを気にするつもりもない。たとえ、また『可愛くない』つて決めつけられたとしても。

「いけない、いけない」

こだわるまいと思つてゐるのに、どうしてもこだわつてしまふ。ひよつとして、あの一言はわたしにとってトラウマと呼ぶべきものになつてしまつてゐるんだろつか。

「転学部の手続きですか!？」

案の定、学生課の事務員はあきれかえつた顔と声でわたしを出迎えてくれた。

「ええ。経済学部への転学部を希望しますから、手続きの書類をお願いします」

入学してから一年以内ならいつでも転学部試験を受験する資格がある。法学部に見切りを付けて以来、転学部する先としては経済学部しかないとはい定めていたのだ。

「経済学部……ですか。法学部から——!？」

事務員が呆れるのは、ある意味、当然というのは、帝立大学で最も難度の高いのが法学部で、経済学部はやや難度が下がる。普通、経済学部から法学部への転学部を狙つ学生はいるけれど、その逆は少ない。でも、わたしに言わせれば、あんなことを学ぶためにわざわざ法学の門を叩く学生は気の毒と言つしかない。ただ、わたしも一度は幻想と錯覚を抱いてしまつていたわけなので、彼らを悪く言つことはできないのも確かだ。「そうです。早くしてください。できるだけ早く手続きを済ませたいですから」

軽はずみは禁物ですよ。一晩置いて、頭を冷やしてからよく考えてみてください——そんな言葉と共に、事務員は書類を用意してくれた。お役所仕事の典型のような大学の学生課だけれど、この事務員は例外的

に真面目で親切だった。

だから、彼の忠告は余計なお世話ではなくて、心からの親切だったはずなんだけれども——結果的には、彼の親切は有り難く謝絶させて頂くことになった。わたしが、転学部申請書類を提出したのは、その日の内のことだったから。

「一言くらい、事前に話をしておいて欲しかったね」

さすがに父には言い出しにくかったのだけれど、黙っていることはなおのことできなかった。帰宅後直ぐに父の書斎を訪れて、転学部のことを報告すると、父はちよつと渋い顔をしながらも頷いてくれた。

「お前のことだから、昨日や今日の思いつきではないだろう。ただし、二度目はないようにして欲しいものだね」

そう言うてくれるだろうとは思っていたし、事前に相談もしようとは思ったのだ。やはり心配させるのが嫌だった——というのは言い訳かも知れない。父に心配そうな顔をされるのが気が重かったのは事実だけれど。

「はい、お父さま」

経済学部がすごく面白いところか、と言つと実は、そんなには期待していない。帝国では昔ながらの経済学がそのままストレートには適用できないとよく言われている。帝国の半分近くを占めている貴族領と、フェザンの存在のせいで、帝国は帝国政府による支配と貴族領支配、そしてそれらに被さるようなフェザンの経済支配が入り交じっているために、理論通りには経済が動かないのだ……というのは、一般科目で取っている経済学の講義内容だ。

わたしには異論があつて、そうは言つても人間が生活している世界な

のだ。今の帝国の姿にしても、過去、まったく例がないというわけではないし、地球時代にはたった一つの惑星の上で一〇〇以上の国家が並列していた。その時代に育^{はぐ}まれた経済学が、今の帝国に通じないなんてことがあるわけがないのだから。それに、皇帝陛下の威光がいくら大きくても、経済の動きまではそのお言葉一つで動かすわけにはいかない。

ただし、わたしの大きな目的の一つは学部そのものではなくて、学部^{ケイタイ}に付属するビジネス・スクールだった。法学部の学生には受講資格がない。経済学部に移れば、一部だけれど講座を受けることができる。

部屋に戻った時、PDAからメールの着信音が響いた。

実は大学入学と同時に新型を別^{ケイタイ}に買つて、父やハンス、友人達との連絡はもっぱらそつちを使っている。旧いPDAを、まだ使っているのはゲルタとの連絡のためだし、それだけにいいそれとは捨てることができないのだ。

『転学部は思い切った決断だと思いますが、興味の持てない学問に無理にしがみついても得るものは少ないでしょう』

メールの文面に、わたしはちよつと嬉しくなつてしまふ。相変わらず、無駄なことを言わない女^{ひと}だと思つた。

実は、わたしの大学入学を挟んだ半年以上——正確には八ヶ月余り、ゲルタとは音信が絶えていた。いくら、こちらからメールを送つても、音声^{ボイス}メールを残してもまったく応答がなくなつたのだ。

ゲルタとわたしとの考え方の違い。色々な意見交換を通じて、少しずつそれが分かつてきていた。無条件に信頼し得る人間だとは、彼女を位置づけられなくなつていたのも確かだった。ゲルタの方も、それは察していただろう。

だからと言つて、一方的に音信を断たれるほどのことをした覚えはな

かったので、正直、ショックでもあった。旧くなったPDAを、新しいのを買ったのに捨てなかったのも、ひよっとして急に連絡が来るかもという期待を捨てられなかったせいもある。

連絡が再開したのは三月ほど前からだ。長い無沙汰を詫び、半年以上の入院加療生活を告げるメールと共にだった。詳しい病名は書かれていなくて、『兄を戦いで亡くしたショックで体調を崩してしまいました』とだけ。

実は、ゲルタがシュミットバウアー男爵家の人らしいことは少し前から分かっていた。彼女の言う『兄』がヨハン・クレメンツ・フォン・シュミットバウアー准将だろつということも。

シュミットバウアー准将の戦死公報が出たのと、ゲルタからの連絡が絶えたのはほとんど同じ頃。時期も合う。それに准将戦死の経緯については色々怪しい噂が飛んでいたことは、わたしの耳にさえ入っているのだ。今は、噂のことをあれこれ考えている時間はないけれど、普通じゃない死に方だったらしいことは分かるし、ゲルタが酷くショックをつけるような亡くなり方だったんじゃないかとも思っている。

『まだ友人として連絡を取り合ってもらえるなら幸甚です』

そう結ばれた文面が嬉しくて、わたしは直ぐに歓迎のメールを送ったのだ。

以来、前ほど頻繁ではないけれど週に何通かのペースでメールやボイス・メールのやりとりは続いている。

『ビジネス・スクールのコースは学部の正規の単位としては認められませんが、同時受講はその点を注意してください。私は経済学やビジネス・スクールのことは疎いですが、あなたの判断を非とする根拠はありません』

これもやはりゲルタらしい判断だと思う。

思うのは、基本的に論理的な考え方を崩さない彼女が、一点だけ、帝室へのスタンスだけは絶対に譲らないことだ。帝国の政治や社会を悪く言っても、彼女はいつも冷静に応答してくれる。それなのに、一言でも皇帝陛下への非難につながるようなことを言った瞬間に、もの凄く冷ややかな応答が跳ね返ってくる。

『これは、私にとっては理性ではなくて感情の問題ですから』

ゲルタはそう言うのだが、その点がわたしにはまだよく理解できない。『あなたが愛する人を、たとえその人が実際に非難されるべき人物だったとしても、他者に批判されたとすれば、あなたも似たような反応をするでしょう』

そうなのだけれど、そう言われるとますます分からなくなる。愛する人だとしても、その人が非難される理由があるのなら非難は受け入れるべきじゃないのかしら。受け入れて、非難されないように修正してくれるように言っべきだと思っただけだ――

怒るかな、と思っただけだ。ゲルタからの返信は珍しく笑っているように見えた。

『あなたはまだ人を愛したことがないのね。その時が来たら分かると思います』

それはそうだけれど……愛しているからって言って、その人の欠点すべてに目を瞑って庇うばかりが愛していると言っただとは思えないのだ。

『リヒター講師については、貴族の間ではよい噂の対象となった例は少ないそうです』

例のビジネス・スクールで評判になっているコースの講師の名前だった。オイゲン・フォン・リヒター。結構有力な貴族なのに、フォン・リヒターではなくてリヒターと名乗っていて変人扱いされている。この間、

父を訪ねてきていたヴィステインゲン侯爵なんかはもつとひどいことを言っていた。

「あやつは皇帝陛下から頂きし爵位を無視し、フォンの称号を敢えてまで捨てて名乗っている。皇帝陛下に対するあからさまなほどの叛意を示すものでなくて何だというのだ。典礼省に告発すべきとわしは考える」

そうではなくて、オイゲン・リヒター卿は何かの意図があつて、わざとフォンの称号を省いているのだ、と父は侯爵をなだめていた。意図が何かは公言していないが、叛意あつてのことではないはずだ、と。

ヒルデガルト・マリィンドルフ……別にフォンがなくても、そんなに変には感じない。

『フォンを敢えて省くのは、貴族という存在に反感を持っている。あるいは、貴族という存在を無用のものと考えている、ということでしょう』

今度もゲルタはずばりと言い切ってくる。わたしも全く同意見なのだ。オイゲン・リヒター卿の意図というのは、貴族をなくしてしまえということなのだろうか。貴族をなくして、どうしようというのだろうか？

そう考えて、わたしはこのオイゲン・リヒターという人物に興味を持った。その人物が、これから受講資格を得られるビジネス・スクールの講師で、しかも、彼の講座はわたしも受講可能だというのだ。これを受けずに、何を受けようと言つべきだろうか。そのコースの開講時期考えても、今日、転学部申請を出すのはぎりぎりのタイミングだったのだ。

『フォンという称号に無用のこたわりを抱く人々よりも、接して価値のある人物だろうと思います。その点で、あなたの判断は間違っていないはずです』

本当に不思議な人だと、思つのはこんな時だ。貴族を無用というのなら、その貴族を作つた方々もやつぱり無用と考えているんじゃないのかな、そう思つのが普通だろう。なのに、ゲルタは非難が直接に皇帝陛下

に及ばない限り、むしろ、今の帝国に反感とか敵意を持っているようにさえ思えるのだ。公言はできないけれど、わたし自身がそうであるように。

『——正式に命を頂き、西苑に勤めることになりました』

珍しくメールの末尾には近況が述べてあった。

「ウェスト・ガルテン
西苑？」

——っていわゆる後宮じゃ？一瞬想つたのは事実だが、ゲルタはきちんとフォローを入れていた。

『皇帝陛下の後宮に入ったのではなくて、後宮に入った方々をお世話する仕事を頂きました。念のために申し添えておきます。では、よい大学生活を、ヒルダ。危ないところに近づかないように、気を付けなさい』

「はいはい、ゲルタお姉様」

実際、彼女の方がわたしより五、六歳年長なのは知っている。注意をくれる時の口調は、年長の姉そのものだ。わたしは一人っ子なので、年長の姉妹や兄弟を持つ感覚はよく分らないが、氣遣つてもらえる嬉しさ、頭の上を抑えられるようなちよつと鬱陶しいような気分が混じつて不思議な感じだった。

ただし、ゲルタのことを『ゲルタお姉様』などと呼ぶのは口だけのことだ。絶対にメールには書かないことにしている。何故か知らないけれど、それだけは彼女の逆鱗に触れそう、そんな気がしたから。

実際のところ、ゲルタの意見が自分のそれとぴたり同じだったとしても、わたしは直ぐに自分が正しかったとは思わなくなっている。たとえばヴィステインゲン侯爵のような人の意見も、最近では冷静に聞くことができるようになった、と思つ。こつこつ考え方の人もいる、と思つて。いろんな立場から眺めてみて、視線が交差しところに真実がある、と言つてくれたのもゲルタだけれど、それができるようになった結果、